

「底が突き抜けた」時代の歩き方 440

「これらの写真は私たちなのだ」-終わりのなき戦争 終わりのなき写真の流通

スーザン・ソントグは「他者の拷問への眼差し」（『論座』04. 8）で、アブグレイブ刑務所拷問事件について、《拷問が（「みんな」がやったのではなく）少数の人々の仕業だったか否かが問題なのではない——あらゆる行為は個人がおこなう。それが組織的なものだったか否かこそ問題なのだ。つまり、承認され、容認されたものだったのか。それは——右にあげたすべてだった。問題は、アメリカ人の少数派のうちの多数がそのような行為に手を染めた、いや染めなかった、ではない。現政権が遂行する政策の本質と、それらを実施するために運用されている支配構造とが、そうした行為を生み出しやすいものだったか否か、それこそが問題なのだ》という。

イラク人収容者に対する拷問と、それを写真に撮った行為が、「イラクに民主主義と人権をもたらす」というスローガンを掲げたアメリカによるイラク侵攻の目的と相容れないものであったのか、それともその目的と合致し、むしろその目的に押し上げられたものであったのか、《それこそが問題なのだ》と読み替えてみる。どうしてそのようなスローガンと拷問とが結びつくのか。いいかえると、「イラクに民主主義と人権をもたらす」という善事が、どうして拷問のような悪事に帰することになってしまうのか。この問いは、理想を現実の中で追求すると、どうして地獄になってしまうのかという問いとして受けとめてきたが、そこで考えたことは、理想は理想を担う主体（人間）に対して、あるがままの現実を理想にむかって変革されるべき現実として捉えることを要請せずにおかなくなることが、人類の悲劇の発端となっているということだ。

理想が個人の手の届かない遠くに輝いているだけであるなら、理想はなんの加害ももたらさないどころか、場合によっては彼の人生に励みを与えることもあるだろう。ところが、理想が集団の内部に宿って革命思想のかたちをとるやいなや、理想は集団の構成員を理想の実現という使命を帯びたあるべき人間へと変え、理想が生み出されてくる、腐敗し、干からびた貧相な現実を理想的な現実へと変革すべき対象として捉えることを、理想が宿った集団の人々に迫る。もちろん、理想は悲惨な現実から生みだされた単なる願望にすぎないから、その願望にどんな革命思想を被せようとも、願望は願望として彼らによって膨らまされるほかない。願望としての理想が汚濁のような現実の中に生きている人々に人間不在の混沌としたおぞましい地獄を突きつけることになるのは、観念として理想を生きることが一人一人に要請され、理想を生きことは現在のあるがままの現実を否定して、理想に向かう現実の中で生きることとみなされてしまうからである。

いうまでもなくあるがままの現実理想を目指しているわけではない。あるがままの

現実はその自体として存在し、混沌としている。あるがままの現実を理想に向かう（べき）現実として捉えるのは、理想に掴まれた集団の人々であり、理想はかろうじてそのようなかたちをとって彼らの観念に伏在しているにすぎない。理想が育まれる現実の萌芽はどこにも見当たらないにもかかわらず、というよりどこにも見当たらないからこそ、自らの観念の中に理想をかかえこんだ彼らは、あるべき理想の人間として生きることを迫られ、汚濁の現実の中の存在が惹き起こすさまざまな矛盾に覆われながら、それらの矛盾を克服することが理想へと近づくための生き方であると思い込み、破綻と自滅に追い込まれていくのである。どうしてそうになってしまうのか。

北朝鮮の主体思想が^{チュチェ}黄長燁^{ファン・ジヤンヨフ}によって提唱され、確立されたとき、「永遠なる人民の楽園」とか「みな一緒に生きがいをもって生きる未来社会」の建設を目指す主体思想とは、北朝鮮の貧しい現実から立ち上がってくる単なる願望にしかすぎなかった。いくら主体思想と銘打っていても、それは大いなる願望を高らかに謳い、空想と同義の願望を羅列したものにすぎなかった。誰もが素朴に抱く願望にしかすぎない主体思想を国家のイデオロギーとして国内の現実に向かわせていくとき、一体、どのようなことが起こるか。明白なのは、主体思想が現実を搔い潜っていくのではなく、現実のほう为主体思想に適合させられていくことになる倒錯であった。そもそも主体思想は北朝鮮の理想とは程遠い貧相な現実から湯気のように湧き上がってきた自然な願望にすぎなかったから、主体思想が現実にならざることはありえず、というより、願望は現実から遠去かっているが故にいつまでも願望でありつづけられたので、主体思想が存続するためには現実から常に遠去けられていなければならなかった。

主体思想のほうから現実にならざることはできないのであれば、現実のほうから主体思想にならざる以外になかった。つまり、あるがままの現実が主体思想にならざるべくいくためのフィクショナルな現実へと変えられねばならなかった。正しいのはどこにも具体的なかたちでは存在しない抽象的な主体思想であって、間違っているのは主体思想を受け入れられない具体的な現実であったから、主体思想に無理矢理合わせるために具体的な現実にはメスを入れて強引に切開したり、いじくりまわすことが具体的な現実の中で生活している人々に対して、地獄的な事態を惹き起こさない筈がなかった。

思想というものが理想であったり、願望であってはならなかった。同様に、理想や願望が思想的な衣裳をまとってはならなかった。思想はあくまでも現実の混沌を生きている中でかたちづくられていくものであって、現実の中で滞留しながら現実をたえず見つめる幻想的な場所を確保していなければならなかった。アメリカが「イラクに民主主義と人権をもたらし」ために、真面目にイラクに侵攻したとき、彼らは軍事的に侵攻しただけでなく、米国流の民主主義と人権をもってイラクの現実には侵攻したのである。当然のことながら、イラクの現実にはサダム・フセイン政権が打倒されたか否かにかかわらず、米国流の民主主義と人権を受け入れなかった。というより、受け入れることができなかった。外部に位置するアメリカの強引さにイラクの人々が反撥したということ以上に、イ

ラクの現実が米国流の民主主義と人権を受け入れる土壌を本来的に欠いていたのである。ブッシュ政権はそのことを理解しなかった。伊拉克の現実が自分たちの民主主義と人権を受け入れないなら、受け入れられるような現実へと伊拉克を変えればよい、という相変わらずの発想であった。そして相変わらずの地獄を惹き起こしていたのだ。

以上から、「伊拉克に民主主義と人権をもたらす」ため、というアメリカの善良な動機が、どうしてそれを根こそぎ引っくり返すような拷問事件などという、腐敗した忌まわしい悪事を惹き起こすことになったのか、とけっして問うべきではなく、「伊拉克に民主主義と人権をもたらす」というアメリカの独善こそが、その中に拷問事件のような出来事を胚胎していたのだと考えるべきなのである。伊拉克の人々が自分たちのいうことを聞かないのであれば、おとなしく聞くようになるまで爆撃は続行するし、拷問も徹底して行うが、そのどこが悪いのか、というのがアメリカの言い分であった。爆撃の続行や収容者に対する拷問は米国流の民主主義と人権をむしろ損なうものではないのか、という反問が顧みられることはなかった。「伊拉克に民主主義と人権をもたらす」ためには、民主主義と人権に相容れない行為までやってのけるのだ。米国流の民主主義と人権とは、その理念と真っ向から衝突する、野蛮で人間不在の行為などで敷き詰められていくような民主主義と人権であったといえる。

理想を実現していくためには、現実が地獄と化することを誰も厭わないという、人類が歴史上で繰り返してきた「呪われた理想主義」がそこに脈々と受け継がれているのが認められる。ソントグは、《これらの写真は私たちなのだ。つまり、この政権の特徴的な政策と植民地支配の基本的な腐敗とを、これらの写真は表象している》という。これらの写真を撮った者も、これらの写真の中に映し出されている加害者と被害者も、更にこれらの写真として私たちの目の前に突きつけられてくるすべての背景や状況と共に、《これらの写真は私たちなのだ》ということだと考えられる。これらの写真は私たちの世界ではないのか、ということだ。

収容者たちは法的な保護の一切を剥奪された「人間ではありえない者」たちとして拷問に晒されつづけているが、《真の問題は写真そのものではなく、写真が暴露した出来事、つまり、アメリカによって拘留されている「被疑者たち」の身に起こった事態なのだろうか。いや、そうではない。写真で見る出来事の恐怖は、写真が撮影されたという事実そのものの恐怖と不可分である——無力な囚われ者たちを前にしてポーズを取り、悦にいつている加害者たち。第二次大戦当時のドイツ兵たちも、ポーランドやロシアでみずから手を染めた残虐行為の写真を撮ったが、被害者に囲まれた処刑人を被写体にしたスナップ写真は無に等しいくらい稀だ。（中略）問題の写真が映し出していることに匹敵するものがあるとすれば、1880年代から1930年代にかけて撮影された黒人リンチの被害者の写真だろうか。そこには、いたぶられた黒人の男性なり女性なりの木に吊り下げられた死体の下で、にやりと笑っている辺鄙な町のアメリカ人たちが写っている。リンチの写真は、自分たちの行為はまったく正当だと信じ込んでいる当事者たち

による、自分たちの集団行動の記念写真である。アブグレイブの写真もそれと同じだ。》

真の問題は写真に映しだされている事態にあるのではなく、なによりも《写真が撮影されたという事実そのもの》にある、とソントグは指摘する。戦場や刑務所で目をおおいたくなるほどの数々の残虐行為がこれまでにあったことは本で知ったり、いくらか想像することができるけれども、《自分たちの集団行動の記念写真》のようにして当事者たちに撮られるということにはなかった。もちろん、それは写真技術の進歩を抜きにしてはありえないが、拷問するというこの上にその拷問の様子を写真に撮って保存するという、人間の新たな行動が確実に付け加えられたのである。つまり、こういうことだ。人間は状況次第によっては平然と残虐行為に手を染める存在である、ということはすでによく知られている。しかし、その上に、《自分たちの行為はまったく正当だと信じ込んでいる当事者たちによる、自分たちの集団行動の記念写真》として、リンチの写真を撮影することもありうる存在であることが暴露されたのであり、「人間とは何か」という根本の問いを深めざるをえなくなったということなのだ。

百年前に撮られたリンチの写真とアブグレイブの写真との間に、《違いがあるとすれば、写真を撮るという行為がますます一般化していることから来る差異だろう。リンチの写真は褒賞としての写真という性格をもっていた——収蔵やアルバムに保管することを目的に、プロの写真家が撮った。絵葉書にもなったし、展示もされた。アブグレイブでアメリカ兵たちが撮った写真からは、写真の使い道という点で変化が起きていることがわかる——モノとしての写真を残すことよりも、メッセージを送り、流布させることに重きが置かれているほとんどの兵士はデジタル・カメラをもっている。かつて戦争写真の撮影は写真ジャーナリストの領分だったのが、いまでは兵士すべてがみずから写真を撮るようになった——自分たちの戦争、快楽、写真効果のあるものごと、そして自分たちの残虐な行為を記録する。そして、仲間うちで写真を交換し、世界中に e-mail で送る。》

自分たちの目の前にいる囚人たちは、もはや自分たちと同じ人間とはみなされていなかったし、取り扱われていなかった。戦場とはそのような場所であった。相手が自分と同じ人間だと思ってしまったら、殺すことなどできなかったし、相手の苦痛の表情を面白がることなどできなかった。人は相手が自分とは別の生き物だと感じるようになってからこそ、相手に対してどのような残虐な仕打ちも行えるのである。アメリカ兵にとってイラク人の囚人は、自分たちとは異なる別の生き物であった。その生き物は自分たちアメリカ兵に抵抗し、襲いかかってくる獰猛な者たちであったから、情報をとるために彼らを拷問にかけ、屈辱を与えてどうして悪いのかということであった。犬か豚などの畜生にも等しい連中としてしか映っていなかったら、そんな連中を背景にして記念写真を撮ることがどうして非難されなくてはならないのだろう。というのが拷問にかかわった兵士たちの率直な思いだったにちがいない。

しかしながら、囚人たちがいくらアメリカ人が嫌悪するアラブ人であろうとも、彼ら

が人間であることには変わりはない。アメリカ兵たちがいくらなんでもイラク人の囚人を自分たちと同じだとは思っていなかったとしても、彼らが人間であることは否定していなかっただろう。ただ彼らは自分たちとは異なる別種の人間であり、自分たちと同じ人間だとは思っていなかっただけなのである。率直に言えば、イラク人の囚人は自分たちの下位にある劣等な人間にほかならなかった。どうしてそんな思い込みをもつようになったのかといえば、拷問にかかわったアメリカ兵たち自身が、アメリカ本国で下層として中、上層とは同じ人間として扱われてこなかったからだと推測される。同じ人間は理念の中だけであって、弱肉強食と権威が支配する現実の中では同じ人間同士は非常に限定されていた。下層出身のアメリカ兵は剥き出しの現実の中で同じ人間などという戯言はゴミ箱の中にさっさと捨て去っていたから、無力な囚人に対して大きな権限を振るうことのできる刑務所に放り込まれたとき、彼らに囚人の中に同じ人間を覗き込め、というほうが無理な注文であった。

《人間のすることを当人が記録する、このやり方がますます広がっている。少なくとも、いや、とくにアメリカには、現実の出来事をリアルタイムで映画に撮るというアンディー・ウォーホルが理想としていたやり方があり——生活は編集されないのに、その記録を編集するなんて馬鹿げている——それが何百万というウェブキャストの当たり前の手法となった。自分の一日を記録し、自分の現実をショーにする。ありのままの私——目覚めて、あくびして、ストレッチして、歯を磨き、朝食を作って、子供を学校に送り出す。生活のあらゆる面を記録し、コンピューターのファイルに保管し、ファイルをあちこちに送る。家庭生活は、家庭生活の記録作りを軸に展開する——家族の危機や不名誉なことが起こった苦しい局面でさえ、いや、そういうときこそ、これが続く。》

ここでソントグは、人間が生活する人間からその生活を記録する人間へと重心を移すようになったことに注目し、アブグレイブの写真にもそれが顕著にみられることを指摘しているのだ。かつての記念写真は卒業とか結婚とか、子供の入学とか、要するに、自分の人生にとって特筆に値する記念日と結びついていた。ところが、デジタル・カメラの出現はカメラで自分の生活を覗く行為を生活の中に大きく突出させ、すべての記録を記念写真化していくようになった。つまり、特筆すべき記念写真としての意味合いは稀薄化していった。

《デジタル写真やビデオに収録される、それが^{エロティック}快楽的な生活だという人がますます増えている。もしかしたら、性的な要素のある拷問ともなれば、記録対象としてもっとそそられる魅力があるのかもしれない。アブグレイブの写真の公開点数が増加するにつれ、拷問の写真がポルノ写真——アメリカ兵同士の性交、あるいはイラク人収容者との性交、そして収容者同士の性行為あるいはその真似事を強要している場面——と入れ子になって掲載されるようになったことには、考えさせられるものがある。》

ソントグは拷問の写真とポルノ写真とが合体している印象から、《鎖に繋いだ裸体の男を引き回している若い女性は、SMの女王様の定番イメージだ》と語り、《インター

ネット上で見られる膨大な品揃えのポルノ映像と、いまでは普通の人々がそれらを模倣してウェブキャストしている現状》の下、《こうした映像がどの程度まで引き金となって、アブグレイブの収容者たちに加えられた性的拷問が起こったのだろうか》と問う。単なる拷問の写真ではなく、明らかにポルノ写真も意図して付け加えられているのを見ると、我々はそこから加害者は楽しんでいっているという感想を引き出す。

《生きることは写真を撮られることであり、自分の生活の記録をもつことだ。したがってそれは、カメラの一瞬も休まない注視を忘れて、あるいは忘れたと言いつつ——あるいは、カメラの注目に応えて立ち止まってポーズをとり——生き続けることにほかならない。行動することは、映像として記録される一連の行為に加担することだ。無力で、束にして縛られた裸体の被害者たちに拷問を加える。そのさなかの満足の表情は、この大きな筋書きの一部にすぎない。まずそこには、写真を撮られるという根本的な満足があり、今ではそういう場合、(かつてのように)身を固くして、まっすぐ前を見るよりも、浮かれた表情をしがちだ。出来事は部分的に、最初から写真撮影を想定して計画される。にやけた笑いは、カメラのために作ったにやけた笑いなのだ。裸体の男たちを重ねて横たわせたあと、その写真が撮れなかったとしたら、何かやり残したことがあると欠落感をおぼえたにちがいない。》

拷問がいくら恥知らずで忌まわしい人間不在の残忍な仕打ちだとしても、人間というものは、《拷問している相手は下等で卑下すべき人種あるいは宗教の一員だと信じ込まされれば、そういうことでもやる。》その上に、拷問が「イラクに民主主義と人権をもたらす」ために必要なことであり、大いに役立っているとなれば、拷問のあまりもの残酷さに尻込みしなければならない理由はどこにもない。しかし、《これらの写真が明らかにしているのは、そうした行為がおこなわれたという事実だけでなく、行為者たちの側に、写真に映っている事態のどこが間違っているのか、その自覚がまったくなかったという点だ。多くの人の手に渡り、見られることを前提にした写真だと考えると、さらに恐ろしいのは、すべては楽しみ^{フアイヤ}のために行われた、という点だ。残念なことに、この楽しみという観念がますます——ブッシュ氏が世界に語っているのとは反対に——「アメリカの本性と心」の一部となりつつある。》

自分たちと異なる《下等で卑下すべき人種あるいは宗教の一員だと信じ込まされ》て、拷問に平然と加わったとしても、その状況から離れてみるなら、《写真に映っている事態のどこが間違っているのか》ということに気がつくことがあってもよいかもしれない。現に拷問のおぞましさに居たたまれなくなって、内部告発^{フアン}に踏み切った兵士もいたのだから。だが、思い込みでも使命感でもなく、《すべては楽しみ^{フアイヤ}のために行われた》ということになれば、性的拷問に対する自覚はますますなくなっていくと思われる。快楽はすべてに優先されるだろうからだ。

アブグレイブの拷問事件に関するジャーナリストの金子貴一はレポート（『文藝春秋』04. 7）の中で、帰国しているアメリカの予備兵に拷問が起きた理由を尋ねている。

一番目は「復讐」であり、「イラク人は米軍にひどいことをしてきた。戦友のなかには、石油をまかれて焼かれたり、橋から首を吊された者もいる。銃や砲弾で攻撃されるのも日常茶飯事だ。拷問は、我々米兵がゲリラと対等になる唯一の方法なのだ」と答え、二番目に「退屈しのぎ」を挙げ、監視以外の仕事はなく、迫撃砲がいつ飛んでくるかもしれないストレスと睡眠不足の中で、「ほとんどの時間、看守たちはただ退屈していた。虐待の写真を撮った米兵たちは、本国の友人たちに何か見せびらかそうと、思い出や記念に、写真を撮ったりしたのだ。私には彼らの気持ちがよくわかる」と語った。

「退屈しのぎ」のために快楽を求めることが、アメリカではすべてに優先されるようになってきている。だからといって、理不尽な残酷さが罷り通っていい筈がないが、「退屈しのぎ」を解消して快楽が手に入りさえすれば、残酷さも不可欠になってしまっているのかもしれない。ソントグは、《アメリカ人の生活のなかで残忍性がどこまで容認されているか、それを測るのはむずかしい》といて、少年たちの殺戮ビデオゲームや、若者たちの集団儀式における暴力的な馬鹿騒ぎや、高校、カレッジ、大学、スポーツジム等で制度的に繰り広げられている身体的（性的）な侮辱行為を見回して、《アメリカは、暴力の空想と実践が善良な娯楽、楽しみとしてまかり通る国になってしまった》と断じる。

《新しい、好戦的で帝國的なアメリカの使徒たちによって、高尚な精神にもとづく戯れ、あるいは気晴らしであるかのように底上げされて》、パゾリーニの最後の映画『ソドムの市』（1975年）に描かれたような、《ムッソリーニ時代末期の北イタリアにおけるファシストの要塞で繰り広げられる拷問の饗宴》が、《今では当たり前のものと化している》。ソントグが取り上げる次の光景は、そのことを見事に語っている。

《「裸の男たちを積み上げる」のは学生寮の寮生集会での遊びのようなものと、ラッシュ・リンボーがホストを務め二千万人のアメリカ人が聞いているラジオ番組で、電話参加した一人のリスナーは言った。この人は、写真を見たのだろうか。どちらでもよい。その見方、あるいは空想は、番組としては的を射ていた。一部のアメリカ人にとってたぶん、もっとショッキングだったのは、リンボーが返した言葉だ。「その通り！」と絶叫した彼は「まさに私の言いたいことだ。寮の新入り歓迎儀式でやっていることと変わらないじゃないか。それなのに、それを責めて人の生活を壊すのか、我々の軍隊の仕事の邪魔をするのか、そして、いい思いをしたからって彼らを本当に叩くのか、って言いたいね」と語った。「彼ら」とはアメリカの兵士であり、拷問者である。リンボーはまた続けて言った。「この連中は毎日、銃を向けられ発砲されてるんだ。いい思いしたいさ、連中だって。気晴らしって、聞いたことあるだろう？」

相当多数のアメリカ人はむしろ、よその人間——いま敵と推定されている連中のように、あらゆる権利を放棄してしまったかに見える人間——を拷問したり侮辱したりするのはかまわないと考えたがっているふしがある。イラクにおけるアメリカの冒険の愚かさ、馬鹿らしさ、欺瞞を認めるくらいならば、と。楽しみとしての拷問と性的辱めについて言えば、この傾向への異論はほとんど見られず、アメリカは依然として要塞国家へ

の道を歩み続けている。そこでは、愛国者の定義は、武装力と最大限の国内監視の必要性を無条件に尊ぶ者、だとされている。解放を旗印に來たアメリカ人に抵抗したイラク人に、アメリカの軍隊はショックと畏怖を思い知らせた。そしてショックと恐怖こそ、これらの写真が世界に知らしめたものだ。アメリカ人が生み出したものとは——人道的な国際規約を公然と踏みにじり、侮辱する、犯罪的な行動のパターン。いまや、みずからがおこなった残虐行為の前で兵士がポーズをとり、その写真を仲良しや家族に送り届ける。啞然として、驚くべき事態ではないのか？ かつては隠すためならほとんど何を差し出してもいいとされた私生活の秘密を、今ではテレビ番組でさらけ出したくてうずうずしている。そんな社会になってしまったのだ。これらの写真が描き出したのは、破廉恥な文化と、それにおとらぬほどの、言い訳なしの残忍性へのますます高まる賞賛である。》 囚人は自分たちより《下等で卑下すべき人種》だから、そして「退屈しのぎの楽しみ」として拷問をする。だが、拷問の理由として何かが、決定的で根本的な何かが不足しているように感じられる。戦場に赴いている兵士たちが戦争という極限の状況下に置かれているために、無力な収容者に対して残虐な拷問を行っただけであるなら、別に珍しくはないし、殊更驚く必要もない。《人は、他者にはこういうことをする》存在だからだ。しかし、ソントグがここで浮き彫りにしている光景は、それとは全く異なっている。選択不可能な極限状況下に追い込まれた人間が異常な行為に手を染めることがあったとしても、その行為が暴露されたとき、これまではどの国においても国民はその兵士たちの行状を大っぴらに歓迎するような振る舞いはしなかった。兵士たちを名指して批判することはなくとも、負い目意識から謝罪の念を抱いたり、黙したりするのがこれまでの常態であった。

リンボーがラジオ番組で公然と、兵士たちだって「いい思いしたいさ、連中だって。気晴らしって、聞いたことあるだろう？」と放言するのは、相当多数のアメリカ人が敵を《拷問したり侮辱したりするのはかまわないと考えたがっているふしがある》からだ。相当多数の国民がかまわないと思っているなら、拷問だって、何だって許されるさ、という感覚はもちろん、アメリカ以外の国際社会の眼よりも国内の眼のほうが大事という価値観に基づいている。アメリカあつての世界であり、世界あつてのアメリカではないという志向性は、アメリカこそが唯一の世界であり、アメリカ以外の国際社会はアメリカという世界の周辺（国）にすぎないとみなされていることを意味する。アメリカが唯一の世界とみなされているなら、その世界の兵士たちが周辺国で何をしたってかまわないではないか、という傲慢さが隠しようもなくさらけだされたとしても、当然であろう。

《大統領と国防長官による「お詫び」や「胸くそが悪い」だの「忌み嫌う」だのという発言をもって、アブグレイブで明るみに出た収容者への組織的な拷問への対応としては十分だとする考え方は、人の歴史的、道義的な意識に対する侮辱だ。収容者の拷問は不注意による逸脱行為ではない。それは、アメリカ合衆国の国際的な立場を変容させ、抜本的に活を入れ、なおかつ国内の多数の制度や優先案件を再編しようとしてきたブッシ

ユ政権の「我々と一緒か、敵対するのか」を迫る世界闘争のイデオロギーの直接的な帰結である。ブッシュ政権は戦争、終わりのなき戦争という疑似宗教的な原則に国を賭した——「テロとの戦争」とは、まさにこれ以外の何ものでもない。アメリカ合衆国軍隊が動かしている新たな国際的な監禁帝国で今まで起こってきたことは、フランスの悪魔の島やソヴィエト・ロシアの収容所体制の悪名高い所業すらも超えている。フランスの刑罰の島の場合は、まず、裁判と判決がともにあり、ロシアの刑務所帝国の場合でも、何らかの起訴容疑があって、具体的な年数の判決が下された。終わりのなき戦争と言ってしまえば、起訴もなく、収監者の名前の開示もなく、あるいは家族や弁護士との接触も一切なしで、裁判も判決もないままに、終わりのなき監禁を科するのも正当であるかのように受け止められる。超法規のアメリカの刑罰帝国に囚われている人々は「抑留者」なのだ——ごく最近になって陳腐化した「囚人」という言葉なら、国際法やすべての文明国の法律にうたわれている諸権利が暗に認められるというのに。(中略) この戦争では、ブッシュ政権にテロリスト容疑をかけられたら誰でも、非人道的に扱われる事態を招くだろう。この容疑とは、いったいどうやって決まるのか。その定義はけっして議論にふされことなく、しかもたいていは秘密裏に決定される。》

アメリカが自らを唯一の世界とみなし、アメリカ以外の国々を周辺地域とみなすことが、ブッシュ政権の掲げる「終わりのなき戦争」においてどのような事態をもたらすことになるかといえば、《起訴もなく、収監者の名前の開示もなく、あるいは家族や弁護士との接触も一切なしで、裁判も判決もないままに、終わりのなき監禁を科するのも正当であるかのように受け止められ》ていく。つまり、《国際法やすべての文明国の法律にうたわれている諸権利》は、超法規的な刑罰の前で踏みじられていくのだ。運が悪ければ「不審者」扱いがテロリスト容疑に結びつけられて、容疑が不在のまま収監され、どんな些細なものであれ、「情報」を得るために「尋問」が徹底され、《懐柔し、締め上げて吐かせる》ために拷問が正当化される。

《画像は逃げ去らない。私たちが生きるデジタル世界のこれが本質だ。アメリカの指導者たちが問題の所在を認めたのも、画像があったからかもしれない。アメリカ軍が管理する刑務所内での「抑留者」や「テロリスト容疑者」への残忍な刑罰については、考えてみれば一年以上前から、赤十字国際委員会の報告書やジャーナリストの報道、そして、人道主義の諸組織の抗議が出回っていた。(中略) 写真が出てはじめて彼らの注意が向いたが、もう押さえ込むのは明らかに無理だった。大統領やその側近たちに、ことのすべてが「現実」であることを知らしめたのは写真だった。それ以前は言葉だけが流布していたが、この無限のデジタル自己複製と自己拡散の時代には、言葉を隠蔽し、忘却するのは簡単だ。》

ソントグが《画像は逃げ去らない》というとき、言葉はすぐに逃げ去ってしまうけれども、という含みがもたされている。画像は忘却しないが、言葉は忘却するといっても同じことだ。だから、《これからは写真の「襲撃」が続く、と多くのアメリカ人はいや

でも感じとっている。それに慣れることができるだろうか。見せつけられるのは「もうたくさんだ」というアメリカ人もすでにでてきている。だが、世界のほかの人々はそうではない。終わりなき戦争 — 終わりなき写真の流通。》そのことによって、《ラムズフェルド氏が証言しているように、「勇敢に、責任をもって、専門職として、世界中で我々の自由を防衛している、軍隊の名誉ある男女」の信望》が傷つき、《我々の信望、我々のイメージ、帝国としての我々の成功が傷つくこと》を嘆いている。

《「我々の自由」の防衛 — 彼がここで語っているのは、地球人口の5%にすぎないアメリカ人に限られた自由だ — のために、アメリカが勝手に（「世界全域」のうち）ここだと決めた国に、アメリカの兵士たちが駐屯する》ことが当然視されるなかでは、《すでに反動は始まっている。アメリカ人はいかなる形でも、大慌てして自己を断罪することのないよう、警告されている。だが、写真公開がいまだに続いているからには、自分たちには身を守る権利がないのでは、と多くのアメリカ人は受け止めている。けっきょくは、始めたのは彼ら（テロリストたち、狂信者たち）だ。彼ら — オサマ・ビン・ラディン？ サダム・フセイン？ どこが違う？ — がまず我々を攻撃した。》

こう考えることの行き着き先は決まっている。すべては「写真公開」の所為であり、メディアが、とくにリベラルなメディアが悪いとなる。《「彼ら」は「我々」に報復》しているのだ。《もっと多くのアメリカ人が死ぬだろう。これらの写真のせいで。そして写真は、もっと多くの写真を生む。》だが、待ってほしい、写真が、写真公開が問題なのだろうか。《「テロとの世界戦争」においてアメリカでは軍部も文民部門も拷問を認めていることが暴露されたわけだが、これを画像戦争 — 画像に敵対する戦争も含む — という筋書きにまとめてしまうのは間違いだ。ブッシュ政権の最高レベルにまで達する指令系統の命令と共謀によって起こった事態。それをあばいたのがあの写真だが、問題にすべきは写真ではなく、あばかれた事態そのものだ。だが、写真と現実の、そして政策と解釈の区別は、わけもなくかき消える。それこそ、現政権が期待していることなのだ。》

写真を公開しつづければ、アメリカが傷つくし、アメリカ国民も傷つく。諸君はそれがいいことだと許されると思っているのか。アメリカとアメリカ国民にとって「それらが公開されれば、事態はあきらかにもっと悪くなる」（ラムズフェルド）が、それでもかまわないというのか、という論法をブッシュ政権はとっている。もちろん、アメリカ国民も傷つくだろうけれども、本当に傷つき、「もっと悪くなる」のはブッシュ政権とブッシュの戦争であって、アメリカは国民次第でいくらかでも軌道修正が可能である。ブッシュ政権は明らかに自らが招いた拷問事件に対する責任をアメリカ人にまで拡大し、問題をすり替えようとしているのだ。《いつものやり方だが、メディアは自己検閲をするかもしれない。》

《数カ所の戦線で、政府は写真の流通を食い止める努力をしている。現在のところ、議論は法律をめぐるものに方向転換している。いま、あの一連の写真は将来の犯罪に備え

た「証拠物件」として分類されている。写真が公開されると、将来の犯罪に影響を与えかねないという考え方だ。(中略) 上院軍事委員会の委員長ジョン・ウォーナー(共和党。ヴァージニア州選出)は、さらにひどいイラク人収容者への性的侮辱と暴行の画像のスライド・ショーを5月12日、ほかの議員と見たあと、こう語った。「新たな写真は公開すべきではない」と「きわめて強く」感じた。「大きなリスクをおかして従軍している軍隊の男女を危険に陥れるかもしれないからだ。」

だが、写真の公開を制限する本当の原動力は、ブッシュ政権を防衛し、イラクにおけるアメリカの失政を隠蔽すべく繰り広げられているさまざまな動きから来ている。写真にたいする「怒り」を放置すれば、アメリカの軍事力を牽制し、アメリカの目的を弱体化するキャンペーンに拍車がかかる、という考え方だ。イラク侵攻と占領の過程で殺されたアメリカ兵の写真テレビ放映すれば、戦争批判をほのめかすことになる、と感じた人は多い。それと同様に、新たな写真を公開し流通させれば、ますます非愛国的なものと決めつけられるだろう。アメリカの信望、つまり、イメージをさらに悪化させる行為だ、と。》

60年近く前のアメリカは戦争に敗北した日本に乗り込んで、日本軍の組織的な戦争犯罪を大量報道して、指導者に騙されていた日本国民は悪くない、悪いのは騙して国民を戦争へと引きずり込んだ指導者であるという主張と、「日本人よ、あんたらは被害者なのだ」という懐柔キャンペーンを流し続け、指導者と国民を分断して日本国民を慰撫し、日本人の発想自体を解体させる戦略を立てて、日本人に戦争責任問題を放置させるようにし向けていった。アメリカは他国にむかって行ったことを、自国では戦争犯罪はあばくна、《アメリカの信望、つまり、イメージをさらに悪化させる行為だ、と》いうのだ。日本の信望、イメージを散々悪化させてきた癖に。

《やはり、私たちは戦争のさなかにある。終わらなき戦争。戦争は地獄だ》と、ソントグはいう。《「国際的な法律家たちが何を言おうと、私は気にしない。我々はおそらく叩きのめしてやる」(ジャージ・W・ブッシュ、2001年9月11日)。ちょっとまって、当人としては楽しただけなのに。デジタル版の鏡の間では、画像は消失しない。しかり、一枚の写真は1千語に値する。この国の指導者たちが見ることを拒んでも、さらに何千点ものスナップ写真やビデオが出てくるだろう。止めることはできない。》

しかし、いつかは出てくるかもしれないが、いまは止められているように感じられる。本来なら大統領選の焦点になるべきであるのに、イラク撤退論が少数な中ではもはや話題になることすらない。見事なほどにアメリカ国内で沈黙の共謀が成り立っているように見受けられる。「終わらなき戦争」に駆り立てられているアメリカ国民に、アメリカの外にある無数の世界がみえてくるのはいつのことになるのだろう。

2004年9月19日記